中 学 校

平 成 4 年 度

教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

道　　徳

東 京 都 教 育 委 員 会

平成４年度

教育研究員名簿（道徳）

分科会名	区市町村名	学校名	氏名
第一分科会	大田	矢口中学校	宮内富士子
	板橋	赤塚第三中学校	倉科祐一郎
	練馬	豊玉第二中学校	小沼孝行
	足立	六月中学校	小貝宏
	江戸川	小松川第三中学校	柿沼治彦
	府中	府中第一中学校	陸奥功一
	昭島	瑞雲中学校	鈴木浩
	日野	日野第三中学校	○辻野良子
第二分科会	江東	大島中学校	武末潤
	目黒	第五中学校	石田浩
	世田谷	八幡中学校	土岐秀子
	杉並	松ノ木中学校	金澤進
	葛飾	堀切中学校	◎小島一郎
	八王子	四谷中学校	山田毅
	東村山	東村山第三中学校	松村惇

◎　世話人　　○　副世話人

担当　教育庁指導部中学校教育指導課指導主事　谷合明雄
教育庁指導部指導企画課指導主事　山田佳子

研　究　主　題

人間としてよりよく生きようとする力を育てる道徳の時間の指導

目　　次

Ⅰ　研究主題設定の理由 …… 2

Ⅱ　内容項目３－(3)「崇高な人生・生きる喜び」についての指導（第１分科会）…… 3

1　主題設定の理由 …… 3

2　研究の内容と方法 …… 4

(1)　内容項目３－(3)のとらえ方 …… 4

(2)　生徒の実態と各学年の指導のねらい …… 5

(3)　指導方法の工夫 …… 7

(4)　指導事例 …… 9

3　まとめ …… 13

Ⅲ　内容項目４－(4)「勤労の尊さ・社会への奉仕」についての指導（第２分科会） …… 14

1　主題設定の理由 …… 14

2　研究の内容と方法 …… 15

(1)　内容項目４－(4)のとらえ方 …… 15

(2)　生徒の実態の分析 …… 16

(3)　各学年の指導のねらい …… 18

(4)　指導方法の工夫 …… 19

3　まとめ …… 23

Ⅳ　まとめと今後の課題 …… 24

研　究　主　題

人間としてよりよく生きようとする力を育てる道徳の時間の指導

1　主題設定の理由

人間社会における科学技術の進歩と経済の発展は，今日正に目をみはるものがあり，物質的な豊かさを生むとともに，社会の各方面にさまざまな変化をもたらすに至った。社会の豊かさは，一人一人に個性的でいろいろな生き方を可能にさせているが，一方物質万能主義や過剰とも思われる情報が人間の生きる指針や心のよりどころを失わせ，時には人間疎外に陥らせる状況を生み出している。

このような社会の状況は，生徒のものの見方，考え方にも大きな影響を及ぼしているものと考えられる。苦しいことや煩わしいことをいやがり，楽なことへと逃避したり，自己中心的で他人の意見に耳を傾けようとしない傾向も社会の風潮を反映している一面といえよう。社会の変化が急激であればあるだけ，人間としての生き方の自覚を深める指導が極めて重要となってくるのである。

中学生の時期は主体的な自我の確立を求め，自己の生き方についての関心が高まるとともに家族や友人との人間関係をはじめ，自己の進路や将来の生き方などについて不安や葛藤を抱き模索する時期に当たる。中学生の時期に人間性についての理解を深めさせ，主体的によりよい人生を築くための基礎づくりを進めることは重要であるといえる。

道徳の時間の指導では，学校における全教育活動を通して行う道徳教育を補充，深化，統合し，道徳的実践力を育成することを目的とする。人間としての生き方についての自覚を深める指導は，人生に対して強い関心をもち，よりよく生きたいと思っている生徒の願いに応えることになるのである。そして，それは生徒が生き生きと取り組む道徳の時間の授業を創造することによって培われると考えられる。

以上の理由に基づいて，研究主題を「人間としてよりよく生きようとする力を育てる道徳の時間の指導」と設定した。そして，各分科会ごとに学習指導要領・道徳の内容項目をそれぞれ一つずつ取り上げ，生徒が人間としてのよりよい生き方について深く考える授業にするにはどのようにしたらよいかについて研究を進めることとした。具体的には第一分科会が内容項目3－(3)を第二分科会が4－(4)をそれぞれ取り上げ，内容項目のとらえ方，生徒の実態の把握，資料の検討，指導過程や指導方法の工夫などについて研究することを通して，研究主題に迫ろうと考えたのである。

Ⅱ　内容項目３―(3)「崇高な人生・生きる喜び」についての指導（第１分科会）

1. 主題設定の理由

「人間」とは，「人」と「人」の「間」で生きる存在である。一個の「人」が，「人間」として生きていくためには，社会の中でお互いに助け合い，相互の信頼を深めていくことが必要である。ところが，急速に発展し物質的に豊かになっていく社会の中で，人間関係は希薄になり，人の心は逆に貧しくなったと言われている。急速な社会の変化は人々に不安感を与え，物質万能主義は時として人間疎外といった状況を造り出している。その中で，人は，人間不信に陥り，自分さえも信頼できなくなり，無力感に襲われることもある。

このような社会の中で，人が人間として生き生きと生きていくためには，第一に，自分も他の人も同じように「弱さや醜さをもった存在である。」ことを自他共に素直に受け入れることが求められる。そして，第二に，その同じ人間が「弱さや醜さを克服しようとする強さ・気高さを併せもった存在である。」といった人間に対する共感的理解を深めることが必要である。人間は誰でも強さや気高さをもっているということが信じられてこそ，自分を含めた人間を信じることができ，深い人間愛が生まれ，人間としての誇りをもつことができ，ともに人間として生きていくことに喜びを見いだすようになるのである。そして，人間としての道を信じて歩んでいこうとするところから崇高な人生が広がっていくのである。

中学生の時期には，様々な体験から，自分を含めた人間が，弱さや醜さをもつとともに，強さや気高さも併せもっていることに気付き始めてくる。ところが，自己が確立できていないために自分のもつ強さや気高さに自信がもてず，無力感に襲われたり，困難に挫けそうになったりする。このような生徒に，他の人も同様に弱さや醜さに悩み，また，悩みつつも，それを克服しようとしていることを共感的にとらえさせることが大切である。こういった認識をふまえた指導を通してこそ，「自分もよりよく生きていこう。」という思いを生徒の心の中に膨らませることができるのであろう。

このように深い人間理解に立った人間としての生き方・在り方の問題は，誰にでも共通のものであり，生涯の課題ともなり得るものである。そして，自己を確立しつつある中学生の時期にこの課題についての認識を深めさせていくことが必要なのである。

以上のことから，第１分科会では，「人間としてよりよく生きようとする力を育てる道徳の時間の指導」として，内容項目３―(3)「崇高な人生・生きる喜び」を取り上げ，内容項目のとらえ方，生徒の実態，指導方法・指導過程の工夫等の研究を進めることにした。

2. 研究の内容と方法

(1) 内容項目３－(3)のとらえ方

内容項目３－(3)は，「人間には弱さや醜さもあるが，それを克服する強さや気高さがあることを信じて，人間として生きることに喜びを見いだすように努める。」（中学校学習指導要領道徳）である。

ここで私達は，特に「信じて」という点に主眼を置いて研究を進めた。

現代の中学生は，確かなものや実現可能なものは信じられるが，少しでも疑問のあるものや不確かなものについては不安を感じ避ける傾向が強い。誰もが持っている自己の可能性という見えないものの存在を信じ，これからの人生でそれを現実に変えていくこと，そこに人間として生きる喜びも見いだされるのである。

誰でもすばらしい人生を送りたいと思う気持ちがある。つらいことやいやなことを乗り越えていけるのは「よりよく生きたい」「よりよい自己実現を図りたい」という願いが根底にあるからである。

人生を山登りに例えてみる。生きることが社会の中で共存することを意味する以上，この山登りでは他の人とのかかわりを無視することはできない。したがって，山登りの第一歩は自分と他人の心の内にある弱さと強さに対する共通認識と，その上でお互いを支え合う人間への温かい心の芽生えである。ここに「共感的理解」が生まれる。

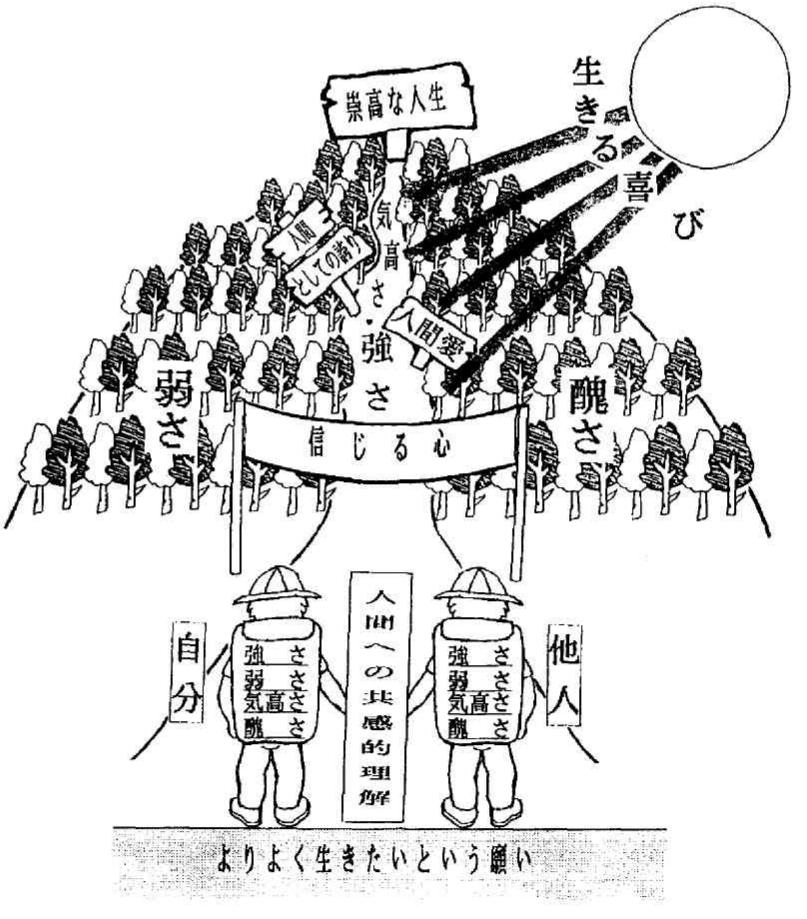


図　1

じるとき，人は自分の背負っている荷物の重さを嘆く。人間の内面の弱さや醜さにばかり目がいく。雨風にさらされ，山中の道で悩んでしまうものである。しかし，目指したもののすばらしさを知っているから，この荷物にはすばらしいものも詰まっていることに気付く。人間の内面の強さや気高さの存在である。これが長く続く山道を登る原動力と言える。

深く険しい林に囲まれていても，必ず頂上にたどり着けるはずだという強い信念が重要である。言いかえれば，どんな山にも「強さや気高さの道」が存在すると信じる心が最も大切なのである。このような道を歩むとき，人は「生きる喜び」という陽光を身に浴び，山を登る喜び，つまり人間として生きること自体に喜びと誇りが生まれてくると思われる。

以上の内容を構造化したものが図1である。

(2) 生徒の実態と各学年のねらい

この項目に関する生徒の意識調査を2つの目的で行った。1つは，日常生活における「人間の弱さ強さ」の自覚の程度，もう1つは自分と他人の心の内面に対する認識の程度についてである。

アンケートAでは，自分の中にある弱さ醜さを自覚できるか，他人の弱さ醜さに理解を示せるか，自分の弱さに打ち勝つ強さや気高さ，そしてすべての人に強さや気高さがあることを信じられるかという観点で場面を設定して，生徒の判断力を問うことにした。

アンケートBでは，心の強さ美しさ・弱さ醜さについて，自分と他人に分けて，感じ方の程度はそれぞれどのくらいであるか，また一般的な意味で「人間への信頼」がどの程度かを調べてみることにした。

A 次の文をよく読み、その場面でのあなたの考えを書いてください。

2 友達のAが、雨が降り出して帰ろうとしたら傘立てにあるはずの自分の傘がなくなっていました。何本かある残りの傘からAは黙って1本抜いて帰って行こうとしています。
このAの行動を見て、あなたはどう思いますか。
1 Aの行動は決して許されないことだと思う。
2 Aの行動は許されないことだと思うが、やむを得ないとも思う。
3 他の人もやっているので、Aを責めることはできない。
4 こういう場合は傘を持って行くのが当然だと思う。

	1	2	3	4	
1年	64.2%	23.8%	8.3%	3.7%	
2年	59.2%	27.3%	10.9%	2.6%	
3年	52.5%	25.8%	16.5%	5.2%	

学年による差は顕著ではないが，上級生になるにつれてAの行動は「許されない」という気持ちが弱まり，「責めることはできない」という気持が強くなっていることが分かる。

このことは，人間は弱い存在であり，自分の経験に照らして「そうすることも仕方ない」と判断した結果が表われたと言える。生徒は，日常生活の中で人間のもつ弱さ醜さの実態を体験を通して感じているのである。

4. 白い杖(つえ)を持った目の不自由な人が電車を待っています。何かにつまづいた拍子に、その人は黄色い線より前に出てしまいました。まもなく電車が入って来るので危険です。その時、見ていたたくさんの人の中からさっと1人の男性がかけより、手を引いて助けてあげました。
この男性の行動を見て、あなたはどう考えますか。

1 すべての人にこのような行動がとれると信じる。
2 このような気持ちもあるけれど、なかなか行動にうつせないものだ。
3 このような気持ちは持ちにくいものだ。
4 このような気持ちはほとんどなく、たまたまその男性にあった。

	1	2	3	4	3 5.4%・4 3.9%
1年	15.8%	74.9%			
2年	15.4%	78.4%			3 4.3%・4 1.9%
3年	18.5%	77.8%			3 1.7%・4 2.0%

これは，人間のもつ強さや気高さに対する質問である。

実際には行動として表すことができなくても，「助けたい」という気持ちがあると考えている生徒が，各学年とも9割を超えている。

このことは，人間のもつ強さや気高さに対して中学生が抱く信頼感の現れであり，また人間がそうした心をもっているということを信じたいという願いの現れだと思われる。強さ気高さの存在を否定する生徒が学年ごとに減っていく点も中学生の気持ちを物語っている。

B 自分や他人について、あなたはどう思うか。思ったままを答えてください。

［書き方］ 答が「ある」の場合、1を、「まったくない」の場合、4を記入してください。そのどちらとも言いにくいが、どちらにより近いかと考えたとき、1に近い場合2を、また4に近い場合は3を記入してください。

1. 自分の心のすばらしさ(強さや美しさ)を感じたことがありますか。

	1	2	3	4
全体	11.7%	26.7%	39.9%	21.7%

ある（あるいはそれに近い）と答えた生徒が全体で約4割，まったくないと答えた生徒が約2割という結果である。

自分の中に強さや気高さが存在することをうすうす感じている面（信じたい面）と，そこまでは言い切れない面とが約半々であるとも言える。しかし，対象が自分ではなく他人になると，その感じ方は次のように変わる。

③ 他人の心のすばらしさ(強さや美しさ)を感じたことがありますか。

全体	1　54.5%	2　26.3%	3　13.4%	4　5.8%

約8割の生徒が他人の中に強さや気高さがあることを認めている。また，人と接する機会が多くなる上級生ほどその度合いが強くなる。

このことは，学年の進行とともに人間の心の内面に対する認識が深まることを表すとともに，他人と接していく中で自分の中にも心のすばらしさがあることを知らされる機会が多いことを示していると考えられる。

人間は気高い存在であるが，思ったことを行動に移しにくいというのが現実であること，自分のすばらしい面には自信がもてないが，他人のすばらしさへの共感を通して自分にもそういう一面があるのではないかと思いをめぐらすことなどが，今回のアンケートから導かれた結果である。（調査数　1年生205人，2年生424人，3年生200人，合計829人）

以上のような実態把握と考察に基づき，各学年の指導のねらいを次のように設定した。

第1学年　人間には誰にでも弱さや醜さがあることを理解し，自他を温かく見つめ受けいれる心情を養う。

第2学年　人間の弱さや醜さを克服する強さや気高さに気付き，それを信じてよりよく生きていこうとする意欲を高める。

第3学年　自分を信じ，他の人も信じられる心の強さと信頼感を学び，人間として生きることに喜びと誇りをもとうとする態度を育てる。

(3) 指導方法の工夫

① 資料選定の観点

第1分科会では，内容項目3－(3)の指導に供する資料を次の諸点に留意しつつ選定した。

(ア) 教師自身が感動し，心魅かれる資料。

(イ) 生きる喜び（生きていてよかったという気持ち）を実感させられる資料。

(ウ) 生徒が勇気づけられ，励まされる資料。

(エ) 人間の弱さ，醜さを生徒が共感をもって受けいれ，自分の問題として考える手掛かりのある資料。

上記の視点に立って資料を収集，検討してみたが，内容項目３－(3)のねらいを考慮すると，生活に身近すぎる資料は，かえって生徒の発言を限定してしまい，生きる喜びを実感させるところまで深まらないのではないかという意見があった。そこで，日常性に欠けるものであっても，生きることのすばらしさ，人間のすばらしさを感じ，心を動かされる資料を探すことにした。相馬靖雄さんの講演，（於：平成元年３月１１日，江戸川区立松江第一中学校）を資料化した「両脚なく，親の愛なくとも，自分を信じ，人を愛し」は，生徒の日常生活に即した内容ではないが，感動できるものであると考え選定した。

② 資料提示の工夫

資料そのものが長く，また，内容項目３－(3)以外にも多くの価値内容を含んでいるため，ねらいとする価値に焦点化できるよう，資料を一部削除したり再構成したりした。

加えて，生徒が著者（相馬靖雄氏）の生き方に感動を覚え，授業に入り込めるような朗読の工夫を試みた。

③ 指導過程の工夫

資料を検討していく過程で，その内容が生徒の日常生活からかけ離れているため，資料の中身を整理し，理解しやすくする必要があると考えた。また，内容項目３－(3)は，他の内容項目との関連が深いので，ねらいをしっかり設定して指導していく必要がある。

(ア) 導入

長文資料であり，展開の段階で十分時間をかけて考えさせるため，導入では，筆者の生い立ちや境遇等の紹介をしたり，体の不自由な方のスライド等を見せるなどして，資料に興味をもたせ，内容をより深く理解できるよう工夫した。

(イ) 展開

資料の読み取りでは，生徒の理解をより深めるため，教師が感情を込めて範読していくようにした。また，長文資料なので，内容のポイントをおさえた上で短くまとめた。

(ウ) 終末

授業を通して得られたことや自分の考えを，作文にまとめ，発表させるようにした。また，時間に余裕がない場合には，後日，朝や帰りの会を活用して，読み聞かせるようにし

た。

④ 資料の概要

「両脚なく，親の愛なくとも，自分を信じ，人を愛し」　相馬靖雄

本資料は，太平洋戦争の末期に満州で生まれ，日本に引き揚げてきた相馬靖雄氏の，苦難に満ちた半生を描いたものである。

実母はすでに無く，満州から引き揚げた後，彼は田舎の叔父叔母のもとで育てられる。ある日，三輪車から落ちる事故に遭い，背中に痛みを覚える。しかし，痛みを訴えても叔母は取り合ってくれない。その後，父が再婚し，親子３人の新しい生活が始まる。だが，痛みは増すばかりで，病院へ行ったが，すでに菌は脊髄に入って化膿していた。手術はしたものの，ついに下半身不随になってしまう。それからというもの，筆者は家から一歩も出してもらえず，学校へも行かせてもらえないなどのむごい仕打ちを，義母から受ける。あまりにも毎日がつらく悲しく，自殺を試みさえもする。だが，いつしか義母への強い憎しみは，絶対に生きてやろうという思いへと変わっていく。そんな思いとは反対に病状は悪化するばかりで，ついに両脚を切断せざるを得なくなる。手術後に両脚のない自分の姿を，鏡の前で目にしてあ然とする。そして，再び生きる望みを失って自殺を図るが，医者や看護婦の手厚い看護と温かい愛情に触れることにより，生きる力を取り戻す。このことをきっかけに社会復帰し，車の免許取得，夜間中学校卒業などを通して，多くの人とすばらしい出会いの場を持つ。反発することが生きる力へつながったとして，義母にさえも感謝の念を抱くようになる。最後まで自分に誇りをもち，負けそうになっても頑張ることにより人の温かさに触れ，それらが，生きる喜びや生きがいになっていったのである。

内容が，生徒の日常生活とは大きな隔たりがあるが，感動を呼ぶすばらしい資料である。

(4) 指導事例　（第１学年）

① 主題名，崇高な人生・生きる喜び（内容項目３－(3)）

人間には弱さや醜さもあるが，それを克服する強さや気高さがあることを信じて，人間として生きることに喜びを見いだすように努める。

② 資料名

相馬靖雄氏，講演要旨　（於：平成元年３月１１日，江戸川区立松江第一中学校）

「両脚なく，親の愛なくとも，自分を信じ，人を愛し」

③ 主題設定の理由

人間は社会生活において，互いに助け合い，信頼を深め合うことを必要とする。しかし，

現代社会においては物質的充足に目を奪われ，心の内面の充実に対する取り組みに欠けるため，大人も子供も自他への不信感が増大する傾向にある。

このような社会の中で，人が人として生き生きと生きるためには，「自分も他人と同様に弱さ・醜さを持った存在である」ことに気付き，それを否定するばかりでなく，認め素直に受けいれることが求められる。そして「人間は，弱さ・醜さを克服しようとする強さ・気高さも併せもっている」という「人間に対する共感的理解」を深めることが必要である。

弱さ・醜さと強さ・気高さの存在に気付き始めてはいるが，自分というものに自信を持てず，自暴自棄の行動に走りやすい中学生の時期，自分も他人も同様に悩み，それでも努力していることを共感的にとらえさせることが重要であり，それができたとき「よりよく生きよう」という思いが伸びていくものと考えた。さらに，一生涯を通して追求されるべき「生き方」の問題を考える起点としても必要と考え，本主題を設定した。

④ ねらい

人間の弱さや醜さを克服する強さや気高さの存在に気付き，それを信じてよりよく生きていこうとする意欲を高める。

⑤ 指導課程

	学習活動及び主な発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入	○本資料の主人公について簡単に紹介し，資料に対する興味をもたせる。	○相馬氏が，どのような人生を歩んできたのかについて興味をもつ。	
展	○資料を読む。 発問 ① 何が印象に残りましたか？ すばらしいなと感じた点，良くないなと感じた点を	○朗読を聞く。 感じたことを書きとめる。 ・相馬さんのハンディキャップと苦闘 ・困難と闘い乗り越えた姿 ・看護婦さんの行動	○資料を授業者が朗読する。 資料の余白に感想等を書きとめさせる。 ○生徒が発言しやすいように自由に意見を交換させ，発表させる。

開	あげてください。 ② 相馬氏をより強く自立へと立ち向かわせたものはなんでしょうか。 ③ 相馬氏はどんな姿勢でこれからを生きていこうと考えているでしょうか。	• 自殺を図った時の心境 • 夜間中学校の生活 • 義母の仕打ち • まわりの者の援助を排除したこと • 盗み食いをしたこと • 自殺未遂をしたこと • 義母への反発 • 野外の自然のすばらしさ • 看護婦さんの示してくれた優しさと気高さ	○相馬氏の心情の変化を考えさせ，生徒のとらえ方が特定の部分に固執しないように配慮する。 ○相馬氏が今後の人生に能動的に立ち向かっていこうとする姿から，人間の有する可能性を信じることが大切であることに気付かせる。
終 末	○本時の展開をふりかえり，各自に感想文を書かせる。 ○終章をもう一度読み，余韻をもって終える。	○感想文を書く。 ○自分の今後の生き方に対して問題意識をもつ第一歩とする。	○自他の弱さ醜さを認めつつ現実を受け入れ，くじけることなく現実に立ち向かう気持を高めたい。

⑥ 評価

- 資料読後に明確な印象をもたせることができたか。
- 人間の内に秘められた強さ・気高さの存在に気付かせることができたか。
- 自分の生き方を向上させていこうとする意欲を抱かせることができたか。

⑦　授業の概要及び研究協議のまとめ

資料を範読した後，主人公の生き方を中心に話し合いを進めた。資料は，きわめて深い内容を持っており，生徒の心にしっかりと受けとめられたようである。生徒の代表的な意見，感想等は次のとおりである。

○　どんなにつらいことがあっても自殺はよくない。自分の可能性の芽を摘むことになる。

○　義母の冷たい言葉も，看護婦の励ましも，秋の高い空やコスモスの花も，生きる意欲や希望に結び付けられることはすばらしいと思う。

○　苦しみを乗り越えて生きていく相馬さんに感動した。

○　人は誰もが悩みや苦しみをもっている。しかし，常に希望をもって生きていかなければならないと思う。

○　人と人との出会いが，人の人生を変えることがあるということが分かった。これからは出会いを大切にしていきたいと思う。

終末で感想文を書かせたが，どの生徒も一斉に書き始め，自分の思いを懸命に書きとめていた。

授業後の研究協議では，次の点を中心に話し合いがもたれた。

(ア)　自評

・資料範読で，生徒の心情に訴えるよう心がけた。・発問に対する意見，感想を書かせたので時間がかかりすぎ，感想文を書く時間が不足した。また挙手がなく，指名による発言だったのは残念であるが，発言内容から，それぞれに人間としての生き方を考えたと思う。

(イ)　良かった点，改善点

・感動できるすばらしい資料である。生命尊重や思いやりについても考えさせられる。

・資料範読に情感がこもり，十分に生徒の心情に訴えることができた。

・生徒が意見や感想をよく書いていた。

・意見や感想を逐一書かせるより，生徒の素直な感動や意見を，自由に発言させた方が良い。

・感想文は十分に時間をかけて書かせたい。

⑧　2年生生徒作文（一部略）

どんな理由でも，自殺はしてはいけないと思う。たとえその理由がどんなにひどい事でも死んでしまったら何もかも終わりだ。私だったら絶対いやだ。私は「自分に誇りをもち」という所を見習いたい。この人は，何度も折れかかった自分自身を，誇りと仲間の励ましで生きてきた。自分が人を思いやればやるほど，人は自分を思ってくれる。それを信じて人のつら

さや悲しさ等を知り，思いやることのできる人間になるよう努力したいと思う。（女子）

生きる力というものは，人との出会い，感動，そして憎しみからもくるものだとわかった。誰も生きる権利を持ち，学ぶ権利がある。自信を持って生きれば，きっと何かをつかめる。何かをつかめば，それが幸福かもしれない。ぼくも出会いを大切にして，自分に自信をもって生きていきたい。それを教えてくれた相馬さんにお礼を言いたい。（男子）

3. まとめ

第1分科会では，内容項目3－(3)「人間には弱さや醜さもあるが，それを克服する強さや気高さがあることを信じて，人間として生きることに喜びを見いだすように努める」について，研究を進めてきた。

中学生の時期は，学習，部活動，更に進路選択など，学校生活における様々な課題に直面するが，そのことを契機として，自己を真剣に見つめ考える機会が増え，自己理解が深まる時期でもある。そして，人間は，「弱く醜い」側面と「強く気高い」側面の二面性を持っていることに，少しずつ気付くようになる。しかし，現在の中学生は，自分に自信がもてず，弱さや醜さの面ばかり目がいき，無力感や自暴自棄に陥りやすい傾向にある。そこで，自分だけでなく，誰でも心の中に弱さや醜さがあることを共感的に理解させ，これを克服しようとする強さや気高さも併せもっていることを強調して考えさせようと努力した。そして，例え困難を克服することがむずかしくても，真剣に取り組む気持が大切であり，その過程を通して生きる喜びを感じることができることを，授業の中で共感的にとらえさせることができないかと考えた。

研究に当たっては，まず，より深く生徒の実態を把握するため，アンケート調査を実施した。結果を考察してみると，現在の中学生は自分に厳しく，他人よりも自分が弱く醜い存在であり，強さや気高さはあまりもち合わせていないと感じている。また，困難を克服した時に感じる人間のすばらしさや生きる喜びの存在を，予想以上に多くの生徒がすでに知っているなどが考察できた。

資料に関しては，内容があまりにも生徒の日常生活とかけ離れ，読み物資料としては文章が長すぎるなどの理由から，生徒の資料理解が深まるかどうか懸念した。しかし，授業の時の生徒の様子や感想文などから，十分に感動を呼ぶものであることが分かった。

内容項目3－(3)は，他の多くの項目と関連があり，扱いを一つ誤るとねらいが変わってしまうことが今後の課題として残った。研究を進めていくにつれて，改めてこの項目の内容が，人間としての生き方に深くかかわり，いかに奥深いものがあるかを痛感させられた。

Ⅱ　内容項目４－(4)「勤労の尊さ，社会への奉仕」についての指導（第２分科会）

1. 主題設定の理由

私たちの社会は共同生活を営んでおり，一人一人が働くことによって，社会生活が成り立っているのである。また，勤労を通して，社会生活の発展，向上に貢献することも強く求められている。勤労は，人間生活に欠かすことができないものであり，自らの目標を実現し，生きがいや充実した生き方を追求するだけでなく，社会全体を支える基盤ともなるものなのである。

現在の中学生は，自分と深くかかわったり，自分の個人的目的を実現するための仕事には積極的に取り組むが，集団のためになる仕事やみんなで協力する仕事には消極的になったり，敬遠する傾向がある。日常の清掃活動をはじめ，係・委員会活動，学年・学校行事などの場面で，決められている範囲での仕事はできても，それ以上のことは進んでできない。一つ一つの枠づけをされないと自分から積極的に仕事ができないといった傾向が見られる。

さらに，家庭や地域での仕事の場面でも率先して周囲のために，みんなのために働くという姿勢がだんだん見られなくなってきている。また，社会が急激に変化し，複雑化するなかで，勤労を通して自己実現を果たしているものの勤労のとらえ方が狭く，金銭の取得や物欲的なものの追求になってしまっていることも少なくない。現代は物質的に豊かな社会であり，何でもすぐ手に入る時代である。家庭や地域社会でも自分の役割を分担し，働く機会がきわめて少なくなっている。今の中学生は勤労体験も少なく，また，その喜びも体得できていないことが多い。そこで，地域社会での奉仕活動や勤労体験等の機会を通して，勤労の価値について深くとらえ，社会への奉仕の気持ちを深めさせ，社会のために尽くそうとする態度を育てていくことが重要であると考える。

指導に当たっては，生徒に勤労というものを前向きにとらえさせ，勤労の尊さを理解させるとともに，社会全体への奉仕の気持ちを深めさせることが必要であり，実践に向けての意欲や態度を育てることが大切になってくる。

以上のことから，第２分科会では，「人間としてよりよく生きようとする力を育てる道徳の時間の指導」として，内容項目４－(4)「勤労の尊さ」「社会への奉仕」を取り上げ，内容項目のとらえ方，生徒の実態，資料の検討，指導方法について研究を進めることにした。

2. 研究の内容と方法

(1) 内容項目４―(4)のとらえ方

内容項目４―(4)は，「勤労の尊さを理解するとともに，社会への奉仕の気持ちを深め，進んで公共の福祉と社会の発展のために尽くすように努める。」(中学校学習指導要領道徳)である。

この項目は，従来の学習指導要領項目６と１４が，統合されたものであり，自らなすべきことをやり遂げていく過程において，その喜びや，生きがいを体得するとともに，集団や地域社会に対する奉仕の気持ちを深め，よりよい地域社会の建設を目指したものである。

最近の中学生は，自分の目的を実現するためや，気の合った仲間と一緒にする仕事には意欲的に取り組むが，共同で行う仕事や，集団でする人のためになる仕事については，積極的に分担し，引き受けないという傾向が目立つようになってきた。また，豊かな自然に触れたり，勤労体験・奉仕体験等が，非常に不足している。そのため，他の人のために尽くしたりする社会福祉や奉仕の精神も十分に身に付いていない傾向がある。

一方，教育課程審議会の答申においても，「奉仕活動及び勤労生産的活動の位置付けを明確に」し，「勤労体験の重視，人類の福祉に貢献できる日本人としての必要な資質の育成」の重要性が示された。

そのためには，学校・家庭・地域のすべての場で，今の中学生に不足しがちな奉仕体験・勤労体験を推進するための場と機会を用意する必要がある。生徒は，この体験を通して，学校・家庭・地域社会での自分の立場を理解するようになり，よりよい社会建設のための一翼を担ったという充実感・満足感を体得することができる。そのことが，勤労への意欲，言い換えれば社会へ貢献しようとする気持ちにつながるのである。このような奉仕体験・勤労体験を繰り返すことによって子ども達の心の中に，勤労の尊さの意識が深まり，それが，結果として充実した生き方になると考える。

以上，述べてきたことを構造的に表してみると，図２のようになる。

図 2

(2) 生徒の実態の分析　（調査区域　葛飾，江東，目黒，世田谷，杉並，東村山，八王子）

（調 査 数　1年生　239名　2年生　246名　3年生　249名）

（実 施 日　平成4年7月13日から18日）

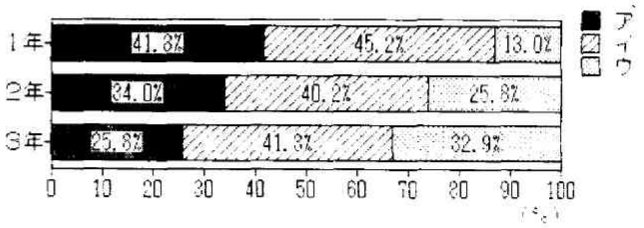
研究を進めるに当たり「勤労，奉仕」に関する都内の中学校の生徒の実態を調査した。アンケート項目の設定に当たっては，勤労や奉仕の心はどんなことを契機に，どういった場で培われるのかという視点から検討した。その結果「家庭生活」「地域への貢献」「学級や学校内での役割」「将来の自分像」等について調査をすることが適切であると判断した。

＜設問1　家庭の中で，あなたに割り当てられている仕事は，ありますか。＞

ア　ある

イ　ときどき，頼まれる

ウ　ない



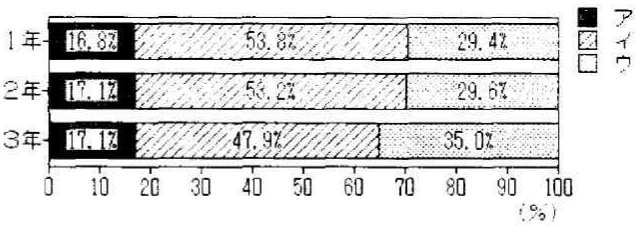
この調査結果から，学年が上がるにつれて，割り当てられている仕事が少なくなる傾向があることが分かった。3年生になると，家庭での役割の分担よりも進路選択を意識して学習に時間を費やす傾向があるため，このような結果が出たと考えられる。

＜設問2　家庭の中で，自分から進んで手伝いをしますか。＞

ア　している

イ　時々している

ウ　していない



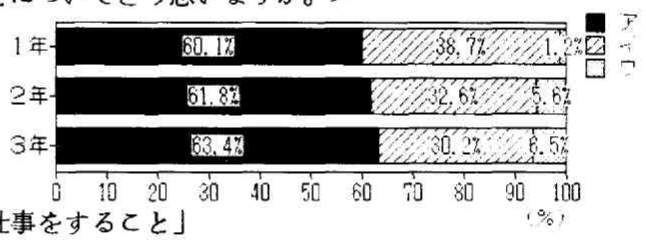
この調査結果から，学年間の差は殆ど認められないが，地域的な差があり，葛飾区・江東区はアの解答が多かった。これは，保護者が身近な場面で働いていることが多いので，勤労に対する意識が幼少の頃から自然に培われてきているものと考えられる。

＜設問3　地域のために仕事をすることについてどう思いますか。＞

ア　必要なことだと思う。

イ　必要だと思うがやりたくない。

ウ　必要のないことだと思う。



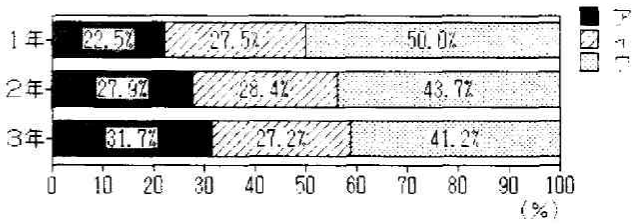
この調査から，生徒は「地域の中で仕事をすること」を必要なことであると考えているが，社会体験や主体的な行動力等の不足から，実行できない状況にあることが分かった。また，ウの回答は高学年になるほど高かった。

＜設問4.　学級・学年・委員会等の活動の中で進んで仕事をしていますか。＞

ア　している

イ　やったことがある

ウ　していない



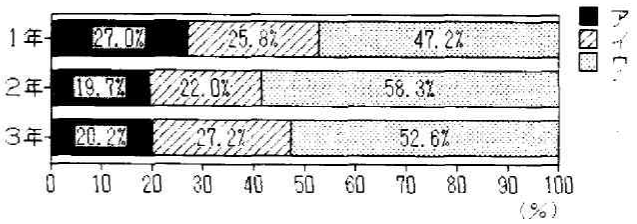
この調査を行ったのが，1学期であったことから，1年生はまだ学校に慣れていない状況がある。学級・学年・委員会の仕事に「主体的にかかわりたい」と思っているものの，まだ様子が分からないために行動に移せないようである。学年別に考察してみると，アを選択した生徒の割合は3年生が多かった。学校にも慣れ学校の諸活動に自信をもっているためと考えられる。

＜設問5.　部活動の中で，仕事をしてうれしいことは，ありますか。＞

ア　ある

イ　ときどきある

ウ　ない



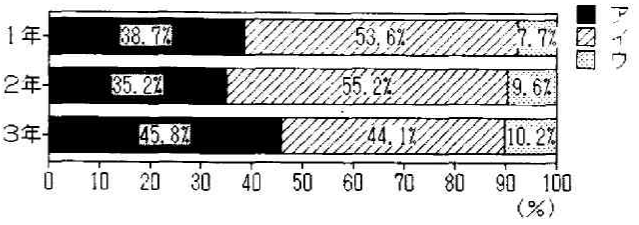
この結果より，各学年ともにウの回答が多かったのは残念であった。私達が，予想していた以上に，現在の中学生が満足感や成就感を味わう機会が少ないことを感じた。

＜設問6.　あなたは，将来役に立つ人間になりたいと思いますか。＞

ア　思っている

イ　少し思っている

ウ　思っていない



この結果より，1・2年はイの回答が多く，3年はアの回答が多かった。どの学年もウの回答が少なかったのは，大変喜ばしいことである。生徒は「自分の夢を実現する」ために希望をもっていることが分かった。

以上のような結果を総括してみると，①主体性の不足から，家庭の中で手伝いをする機会や場があってもできていない　②奉仕活動をしたいという心はあるが，行動に移すことができない　③学校内の諸活動は，方法を理解すると意欲的に取り組むことができる　④仕事をやり遂げたあとで感じる成就感や満足感を味わう機会が不足している　⑤将来，社会に対して貢献したいと思っている生徒が多い　⑥実際に奉仕活動の経験をもつ子どもの中には，そのことに喜びを感じて，さらにその次の活動への意欲をもつ子どもが多いということなどが明らかになった。この内容をもとにして，各学年の指導のねらいを次のように設定した。

(3) 各学年の指導のねらい

—第1学年—

1年生では，勤労の意義についての理解が不十分であり，共同の仕事や課せられた仕事には背を向けることも少なくない。校内においても，様子が分からないためか，進んで仕事に取りくむ姿勢に欠けていることが調査結果を見ても分かる。勤労の尊さと，社会の成員が勤労によって相互依存関係にあることを自覚させたい。1年生にとって身近な問題である学校内の集団に目を向けさせ，それらが主体となっているものを資料として活用し，個々の役割りや与えられた仕事をしっかり果たすことが最も大切なことであるということを理解させたい。

資料例　「ぼくはまじめか」　私たちの道　K出版社

—第2学年—

2年生になると，進路や職業についての関心をもち始め，働くことの意義の理解も，徐々に深まってくる。調査結果を見ると，実際に家庭内で仕事をわりあてられている者，進んで手伝いをしている者が少ないことが分かる。そこで，家族が主体となって働く姿を追った内容のもの等を資料として活用しながら，「働くということ」についての気持ちや生きがいについて考えさせ，家族や社会のために役立とうとする気持ちを高めたい。

資料例　「おばあちゃんの雪段」　文部省「道徳の指導資料とその利用」1

—第3学年—

3年生の時期は，進路や職業について真剣に目を向け，悩み，将来自分はどう生きるかについても深く考え始める。調査結果にもあるように，地域のために仕事をすることが大切だと考え，将来も役に立つ人間になりたいという希望を持っている。自分が社会の一員であるという自覚を促し，社会全体の発展が個人の幸福へつながることを理解させ，社会の発展と公共の福祉のために尽くす心を養っていくことが大切である。

資料例　「ゴミ収集車」　道しるべ　S出版社

以上のような考察から各学年のねらいを次のように設定した。

第1学年　勤労の意義についての理解を深め，自分のなすべきことに対して，責任をもって取り組もうとする心情を育てる。

第2学年　勤労の尊さについての自覚を深め，進んで社会に奉仕していこうとする意欲を高める。

第3学年　社会の成員としての自覚を深め，社会の発展と公共の福祉のために努力しようとする態度を養う。

(3) 指導方法の工夫

① 資料の選定

第2分科会では，項目4－(4)の指導に供する資料を，次の諸点に留意しつつ選定した。

(ア) 日常生活の中の身近な出来事を取り上げた資料

(イ) 自分のこととして考えやすく，活発な話し合いができる資料

(ウ) 勤労の意義や尊さについて，理解しやすい資料

(エ) 将来の仕事に対しての関心を高められるような資料

上記の視点に立って資料を選定したところ「おばあちゃんの雪段」，「ぼくはまじめか」「ゴミ集収車」が候補として上がった。そこで，調査結果を基に，今ある良い面をいかに伸ばすかという方針に基づいて検討した結果「おばあちゃんの雪段」が資料として適切であるということになった。この資料は，杉みき子著「小さな雪の町の物語」の一文であり，雪国を舞台にした極めて地方色の強い作品である。年老いた一人のしゅうとめが，長年続けてきた雪踏みを，一度は嫁に任せるのだが，やはり自分の役目としてひそかに生きがいとしているという話である。生徒たちの日常の生活経験とかなり隔たりはあるが，仕事に対する考えや生き方については，世代を超えて共感できるものがあると思う。また，文章も平易であり生徒たちに勤労の意義について考えさせるのに適したものであると考える。

② 資料提示の工夫

本資料は，地域性があり，東京のような雪にあまり縁のない所では，実感が湧きにくい。

そこで，雪国の絵（雪段づくりの絵）を提示し，視覚に訴えかけて理解を助けるよう工夫した。また，資料は教師が範読して，物語の粗筋をつかみやすくした。

③ 指導過程の工夫

発問を書いた短冊を用意するとともに，生徒の発言の中の重要と思われるものに赤い印を付けて理解が深まるように工夫した。また，内容的に単なる生きがい論や嫁姑問題に話がそれるおそれもあるのでねらいを見失なわせないよう配慮した。

(4) 指導事例

① 主題名　勤労の尊さ　（内容項目4－(4)）

② 資料名　おばあちゃんの雪段（杉みき子　作）文部省「道徳の指導資料とその利用」1

③ 主題設定の理由

現代の中学生は，将来何らかの形で働くであろうという漠然とした見通しはもっているものの，実際に働くことの意義や尊さについての認識は浅いと思われる。これは，第二次，第

三次産業の増加や都市社会の産んだ弊害の一つであり，家族とりわけ保護者が汗して働く姿を見る機会が減少したためと考えられる。中学校卒業後，高校に進学したり，就職することなく，アルバイトをして金もうけをするといった安易な生き方に流されてしまう生徒も少なくない。そこで，義務教育である小・中学校段階の指導を通して勤労の意義や価値に気付かせる必要があると考えた。また，その発展として将来における職業への関心も高められればと考え，本主題を設定した。

④ ねらい

勤労の尊さについて理解を深め，社会への奉仕の気持ちを高める。

⑤ 指導過程（第1時限）

	学習活動と主な発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入	1 家庭で，何か決めた仕事をしていますか。 また，その事をすることによってどんな気持ちになりますか。	・食事の準備・片づけ ・風呂掃除 ・ほっとする ・すっきりする	・仕事をした時の気持ちについて着目させる。
展	2 資料「おばあちゃんの雪段」を読む。教師範読 3 主人公の心情や態度について考えを深める。 (1) 雪が降る季節になって雪踏みの仕事を譲るおばあちゃんは，どんな気持ちだったのか。 (2) 嫁の雪踏みを見て，おばあちゃんはどう思ったか。 ☆(3) 「年寄りだからー」と外に出たおばあちゃんの背中が，しゃんとしたのはなぜか。	・静かに聞く ・複雑な気持ち ・雪踏みを嫁に譲りほっとする一方，寂しさを感じる。 ・嫁は，頑張っているな。 ・やはり，自分が雪踏みをした方がいいかな。 ・気がかりだった仕事に戻れて，気持ちに張りが出たから。	・資料の内容について十分に理解を深めてから，班での話し合いへと進める。 （集団討議） ・自分の役割がなくなることの寂しさ，むなしさに気付かせる。 ・嫁姑，互いに思いやる気持ちがあることに気付かせる。 （集団討議） ・家族の一員としての分担や社会への奉仕の気持ちをとらえさせる。

開	☆(4) 「ただ自分の気のすむために仕事をする」というおばあちゃんの言葉から，何を感じるか。 (5) では，おばあちゃんに手紙を書いてみよう。	・生きがい ・自分なりに納得した生き方をしようとする姿。 ・手紙を書く。	・働くことの生きがいや，満足感を感じとらせる。 ・すぐ本文に入れるように，書き出し文を示す。
終末	4 教師の説話を聞く。	・仕事に生きがいを見い出せることは，本人はもとより社会にとっても幸せであることに気付く。	・千葉から来る行商のおばあさんについて話す。

⑥ 評価

・勤労の尊さを理解し，社会への奉仕の気持ちが深まったか。

・集団討議によって，効果的な話し合いができたか。

⑦ 説話の内容

千葉県佐原市の農家から，毎週決まった曜日に野菜を売りに来るおばあさんがいる。話に聞くと，自分で育てた野菜を暗い内から摘み，大きなカゴに入れて背負い，一番列車に乗って来るという。一束の値段は，その労力を考えると本当に見合わない程の価格である。今では，全んど常連さんの家々でのみ売りさばかれているらしい。 路地や道端で交わされるあいさつや笑顔から何か懐かしさを覚える。都会に住む人間にとってその一束は，田舎の便りのようなものなのではなかろうか。軽くなったカゴを背負って駅に向かうそのおばあさんに，「ありがとう，また来週」と見送る私たちがおり，高齢ながらも軽やかな足どりのその後ろ姿は何やら誇らしげにさえ見えるのである。

⑧ 授業記録 （Pは生徒）

発問(1) 雪が降る季節になって，雪踏みの仕事を譲るおばあちゃんは，どんな気持ちだったのか。

P_1 嫁が雪踏みをしてくれるのでほっとしているが，何となく複雑な気持ち。

P_2 まだ，雪踏みの仕事を渡したくないという気持ち。

発問(2) 嫁の雪踏みを見て，おばあちゃんはどう思ったか。

P_1 嫁も苦労しているなぁ。

P_2　嫁のつくった雪段は，要領が悪く思えた。

P_3　仮り着をしているような気持ち。

発問(3)　「年寄りだからー」と外に出たおばあちゃんの背中がしゃんと伸びたのは，なぜだろう。

P_1　気になっていたことができると思ったから。

P_2　本当は，やりたいと思っていた雪踏みができるから。

発問(4)　「ただ自分の気のすむために仕事をする」というおばあちゃんの言葉から何を感じるか。

P_1　雪段をつくることが，本当は好きだった。

P_2　生きがい

（おばあちゃんへの手紙）

拝啓　おばあちゃん。お嫁さんが雪段を作っている時，おばあちゃんも出て行ってやり方やコツを教えてあげればよかったんじゃないかと思いました。でも本当は，まだ雪段づくりをしたかったのですね。背中がしゃんと伸びたという部分を読んで，これがおばあちゃんの生きがいなんだなぁと思いました。これからも雪段づくりを頑張ってやって下さい。敬具

拝啓　おばあ様へ　私は，おばあちゃんの気持ちがよくわかります。長年やってきた雪段を嫁や孫に任せる時は，とても複雑な気持ちだったと思います。でもそれは，昔からのしきたりというか，受け渡しというかどこの家もそうだから仕方のないことなのかもしれません。

でも，おばあちゃんは，雪段づくりをいつの間にか生きがいに近いものにしていたのですね。こたつに入っていても，仮り着をしている気分だったということは，私にもわかります。

これからも，その心を大切に笑顔をもって雪段づくりに精を出して下さい。敬具

⑨　考察

導入において時間を取り過ぎた。あらかじめ，家での手伝いについての簡単なアンケートを実施しておき，それを基に話を進める工夫が必要であろう。また，資料が長文なので範読後，模造紙に粗筋を列記して掲示し，より理解を助ける方法も考えられる。次に，発問についてだが，(1)・(2)の内容をまとめたものにした方が，生徒も考えやすいのではないかと思う。

また，そのことで発問(3)・(4)の内容を深める時間が確保でき，特に発問(4)においては，自分であるならばという仮定を示すことによって集団討議も活発になり，勤労の意義についての理解も深まると考える。今回は，手紙を用いたが，終末に感想文を書かせる方法も考えられる。また，雪国のイメージづくりには，視覚資料としての絵が，効果的であった。

3. まとめ

第２分科会では，内容項目４－(4)「勤労の尊さを理解するとともに，社会への奉仕の気持ちを深め，進んで公共の福祉と社会の発展のために尽くすように努める。」について研究し，深めてきた。

勤労の意義には二つの側面がある。一つは，勤労を通して自己の適性や能力を発見し，自己実現を図るという個人的側面である。旧学習指導要領ではこの面が強調されていた。もう一つは，勤労を通して社会とのかかわりを深め，自己の役割と責任を果たして社会に貢献するという社会的側面である。新学習指導要領で，この勤労のもつ社会的側面が強調された。内容項目４－(4)は，「集団や社会と個のかかわり」の在り方について，勤労の尊さを自覚させ，この精神をもって公共の福祉の充実を図ろうとするものであり，社会への奉仕の意義を十分理解させることが重要である。その点からすると前に述べた勤労のもつ二つの側面は一体化してとらえることが適切ではないかと考えられる。すなわち，勤労を通して自己の向上を図り，自己実現を果たしていくことがまず重要であり，そうした高まった自己を生かして，社会への奉仕を進めていくという構図が考えられよう。

都市化が進み，物質的な豊かさが進んでいる現代社会では，額に汗して働くという場面が乏しくなってきていると考えられる。中学生もこの傾向にあり，新学習指導要領で，勤労体験学習や奉仕活動を重視しているのは，以上のような社会の状況を踏まえてのことであると考えられる。

研究を進めるに当たって，生徒にアンケート調査を行ったところ，家庭における仕事の分担は少ないが，地域の仕事をする意識や意欲はかなり高いということが分かった。資料を選定するに当たって，学年の発達段階と生徒の身近な集団や社会とのかかわりの観点から，第１学年では学級や学校生活に素材を求め，第２学年では家庭における仕事の分担を，第３学年では社会や地域の中での奉仕が主体となった資料を活用することが望ましいと考えた。ボランティア活動や勤労体験をまとめた生徒作文も資料として考えられる。また，職業の分業化が進んだ現在では，親の働く姿を身近なものとして実感できない実態があり，家族が主体となって働く姿を追った資料の活用も大切だと考えた。数編の資料を検討した結果，文部省資料集第１集より「おばあちゃんの雪段」を選定し，授業を通し検証していくこととした。

実体験の少ない生徒が多い中で，生徒の体験と結びつけながら具体的に授業を展開することが必要である。道徳の時間に培われた道徳的実践力を，日常活動における道徳的実践にまで高めていくことが課題である。

Ⅳ　まとめと今後の課題

中学生の時期は，自らの生き方についての関心が高まり，自分の人生をよりよいものにしたいという願いが強くなってくる。道徳の時間は，この生徒の願いに応え，人間としての生き方について深く考えさせ，自らの生き方を探究させる重要な時間である。

本年度は，第1分科会が3－(3)「崇高な人生・生きる喜び」を，第2分科会が4－(4)「勤労の尊さ・社会への奉仕」を取り上げ，主題を構想し，道徳の時間の充実を目指して研究を進めることにした。そのため，指導のねらいの明確化，及び資料の選定と活用の工夫に努め，授業研究での検証と合わせて，指導方法や指導過程の工夫を図った。

研究に当たっては，まず，指導のねらいを明確にするため，内容項目のとらえ方を検討し，構造図にまとめた。両分科会共に，今回の指導要領改訂に伴って価値をとらえる観点が改められた価値内容である。すなわち，前者は，従来の「人間愛」より独立して崇高なものとのかかわりに関する内容に位置付けられ，後者は「勤労の尊さ」と「社会への奉仕・公共の福祉」の2項目を統合して，一つの内容項目となったものである。この分析を通して指導項目の理解を深め，指導内容の把握ができた。また，指導内容にかかわる生徒の実態調査を実施し，その結果を考察した。これらを基に，各学年の指導をねらいを設定することができた。

資料の選定に当たり，第1分科会では，生きることや人間の持つすばらしさに心を動かし，感動できる資料を選び，資料の朗読の工夫をする等生徒の内面化を図る研究をした。第2分科会では，中学生にも十分理解できる資料を選び，資料の提示を工夫して，社会や家族の一員としての仕事を持つことの生きがいや充実感を感じとらせるよう研究を進めた。

研究を進める過程で，「道徳の時間の指導は，生徒の実態に迫り生徒の願いに応え，生徒自身に自らの生き方を考えさせることが大切であること」，そのため，「資料は重要な役割をもつこと」，更に，「資料や体験を通して，生徒一人ひとりが人間のもつ様々な人間性を深く見つめ，知り，それらを自らの内面と対比しながら，自ら人間としての望ましい価値観を形成していく。教師はその援助をするという重要な役割を担うということ」等を実感できたことは，研究員に共通した大きな収穫であった。内面に育った生徒固有の価値観が，自ら主体的に判断する行動基準となり，人間としてよりよい生き方を求め実践できる基盤となると考える。

研究主題にかかわる指導内容を生徒の内面に定着させるためには，教師と生徒及び生徒相互の好ましい人間関係を醸成すること，また，生徒の主体的な道徳的実践を促すために，各教科特別活動及び，地域，家庭との連携を深めることが大切である。これらを今後の課題として，全教育活動における生き方学習の中核となる道徳の時間の授業研究を続ける考えである。